

周易本義成書年次試論

林 宇 三 郎

一、序 説

朱子撰者の成書年次の決定に積極的根據となりうるものはその書の序文年次であらう。而して答書語錄其他にして成書に言及せるものも亦消極的ではあるが根據とされねばならぬと思はれる。朱子の撰著中にはこの序文年次を缺くものに困學恐聞編、家禮、八朝名臣言行錄、通書解、韓文考異、周易參同契考異、楚辭集註等あり、序文そのものを缺くものに伊洛淵源錄、論孟集註、或問、中庸輯略、孟子要略、及び此所に論ぜんとする周易本義等ありて、その數は案外少くないのである。成書年次とは何等かの形に於て書を成した年次をいふ。それは勿論完成したものではなく、後來屢々更改されたとしても、何等かの形に於てまづ一應の成書を見たる年次を意味する。故に成書年次は必ずしも刊行年次と一致するとは限らない。論孟集註の如く朱子の意志に反して早く刊行されたが、かく刊行されることによつて成書を見た例も多いが、然し撰著に對して著しく良心的であつた朱子自らは我書の後と雖、屢々更改して容易に刊行しなかつた。太極圖說解の如きは四十歳既に成書ありながら、十九年後に始めて刊行したが、かくの如き著しき例もある。

朱子は易に就いて本義と啓蒙を作つた。この外に易傳を加へんとする者があるが、之は後述の如く伊川易傳の誤入である。啓蒙が淳熙丙午暮春の成書なるはその序によつて明瞭であるが、本義は序文を缺き諸說何れも根據を持たず。この小論に於ては便宜上まづ易傳非朱子書説を述べ、次に本義の成書年次に根據を求め私論を試みたいと思ふ。

二、易傳非朱子書説

易傳を以て朱子の書となせるは陳振孫の書錄解題に始まり、馬氏文獻通考、宋史藝文志、之に従ひ、經義考に至つて佚といふ。陳氏曰く

易傳十一卷、本義十二卷、易學啓蒙一卷、煥章閣待制講新安朱熹元晦撰。初爲易傳用王弼本、復以呂氏古易經爲本義。其大旨略同而加詳焉、首列九圖、末列揲法大略、兼義理占象而言。啓蒙之目目、本圖書、原卦畫、明蓍策、考變占凡四篇。（書錄解題卷一）

と。之に據れば朱子には最初王弼本を用ひし易傳のありしこと、並びにその本義に九圖揲法の附録ありしことを知る。然し之等は何れも朱子のものではない。後者に就いては既に王白田の否定説あり、年譜考異並びに白田草堂存藻卷一の周易本義九圖論に詳し。前者に就いても亦白田は

今考之文集語錄、皆未嘗言有易傳本義之異、後來纂輯諸書亦未有言及此者、不知陳氏何據而云然也。（年譜考異卷二、六左）

と兩者を同一とみて（年譜考異卷二、六左）陳氏の相違ありといふを疑つてゐるが、易傳非朱子書に關しては明言してゐない。

右は朱子の校定になる伊川易傳と混同したものである。朱子自身のものではない。その理由とする所を簡単に列舉すれば次の五條となる。

(1) 年譜、行狀、讀書附志、遂書堂書目等皆載せざること。

(2) 王弼本を用ひて易傳を作りしは程伊川にして朱子之を用ふといふはその本意に戻るものたること。

古文周易十二篇、上經、下經、上彖、下彖、上繫、下繫、文言、說卦、序卦、雜卦也。上彖以下謂之傳、相傳夫子所撰、漢人稱十翊。鄭康成始以彖象連經文、王弼又以文言附乾坤二卦、程傳因之。及朱子作本義、乃依東萊呂氏所定之本、分爲經二卷傳十卷、而刪彖曰象曰文言曰諸後增之文。于是千余年微亂之書、釐然復正。（周易本義辨証、凡例一）

と惠棟の言へるが如し。

(3)従つて大旨同而加詳の言、理に於て通ぜず。何となれば王弼本を用ひたる易傳と呂氏古易を用ひたる本義とは大旨決して同じからず、根本的に相違す。

(4)文集語類中明らかに伊川易傳といふものを除いて、單に易傳といへるものは語類に見えず、文集に次の十一書發見出来る。然し之等は何れも伊川易傳を指すものにして、朱子のもものと見らるべきものは皆無なり。

○易傳六冊、今作書、託劉衡州、達左右。此書今數處有本、但皆不甚精、此本雖正稍精矣。(文集三三、一)(嘉清版)(右答呂伯恭)

○小本易傳尙多誤字、已令兒子具稟大本。(文集三三、一九右)(答呂伯恭)

○新本小本易傳甚佳、但籤題不若依官本作周易程氏傳。(文集三五、五右)(答呂伯恭)

○易傳於賤之初爻、亦有不絕小人之說。(文集三五、八右)(答呂伯恭)

○程氏高弟尹公、嘗謂易傳乃夫子自著、欲知其道者、求之於此足矣。(文集四一、一〇左)(答程允夫)

○程集荷借及、略看一二處、止是長沙初開本、如易傳序訟流作訴流、祭文姪作猶子之類、皆胡家以意改者。(文集四三、三)(右答陳明仲)

○易傳平淡、續密好看、然亦極難看。(文集五三、一五左)(答胡季隨)

○刪遺書之未精、探易傳之未至、此在當日楊尹諸先達、猶敢輕言之、今日安敢議此耶。(文集五六、一右)(答趙子欽)

○論易傳。(文集五六、三〇左)(答鄭子)

○周易傳、近思錄。(文集六〇、二五右)(答潘子善)

○易傳初以未成書、故不敢出。近覺衰老不能復有所進、頗欲傳之於人、而私居無人寫得、只有一本、不敢遠寄、且夕抄得、却附便奉寄。(文集六三、二三左)(年譜考異二、六左參照)

(5)更に決定的には乾道五年朱子四十歳の折、伊川易傳六冊を校して書を成してゐることである。陳氏は之と混同したものである。朱子が伊川易傳を校して書を成した次第は次の通りである。即ち乾道五年十月既望の「書校本伊川先生易傳

後」に於て東萊は

伊川先生遺言見於世者、獨易傳爲成書、傳業浸舛失其本真、學者病之。某舊所藏本。出尹和清先生家、標註皆和清親筆。近復得新安朱熹元晦所訂。曾校精甚、遂合尹氏朱子書、與一二同志、手自參定其同異、兩存之以待知者、又從小學家、是正其文字、雖未敢謂無遺恨、視諸本亦或庶幾焉。（東萊文集卷七、一右）

と朱子近定せる伊川易傳あるを述べてゐる。之に先立つて同年夏朱子より東萊に與へたる書に

暑氣浸劇、……易傳六冊、今作書、託劉衢州達左右。此書今數處有本、但皆不甚精、此本曾正稍精矣。須更得一言、喻書肆、令子細依此謄寫勘覆數四爲佳。曲折數條別紙具之、或老兄能自爲一讀尤善也。（文集三三、一左）

と自ら書を成したることを述べてゐる。更に東萊は工畢るや早速一本を朱子に送つて

婺州易傳已畢工、今先用草紙、印一部拜納、告更爲校視、標注示及當令再修也。（東萊別集七、六右）

と云つてゐる。

以上五つの理由により、陳氏の所謂易傳は伊川易傳と混同せるものたることを明らかにした。而して乾道五年伊川易傳を校したる事實は後述の淳熙九年夏六月所定の呂氏古易經相竣つて易本義の成書年次を晩年に在りとする推定に役立つものである。

三、易本義成書年次

王白田の朱子年譜に淳熙四年丁酉周易本義成るといひ、李洪兩年譜を挙げざるは、同じくこの一條のみありし爲にして、果齋の原年譜にも亦然らんとて王白田の従ひしものなるべし。されどその基く所を知らず。王氏自ら

易本義則不知所據也。李微之序言、成於乙巳（五六歲）・丙午之間（五七歲）、當以李序爲正。（年譜考異二、六左）

と言へどその根據を示さず。

李微之の序即ち語類彙錄李性傳後序（朱子沒後三十八年）には次の如く

易本義啓蒙、成於乙巳丙午之間。

と啓蒙を加へてゐる。之は啓蒙の淳熙丙午暮春に據つたものであらう。啓蒙の方はその序により動かかない。次の如き根據により李微之の序の正しきことを論證してみたい。

(1) 朱子と東萊の答書にして兩文集に見えるものは、その大部分撰著に關するもので殊に朱子のものが多い。これは朱子と南軒との兩答書に對して著しい相違である。答呂伯恭百三通、與朱侍講六十五通の内、朱子の撰著に關するものは次の通りである。

答呂伯恭	二	伊川易傳	與朱侍講	二	易傳
同	一五	祭禮	同	七	太極圖解
同	一六	言行錄	同	一一	太極圖、西銘解
同	一八	淵源錄	同	一二	太極圖論解、西銘
同	二七	淵源錄	同	一五	太極說、精義
同	二八	精義	同	一七	精義
同	三一	外書淵源錄	同	一九	通鑑
同	三六	中庸章句、淵源錄、外書、	同	二〇	淵源錄
同	三七	通鑑綱目	同	二四	淵源錄、外書
同	四〇	通鑑	同	二八	外書、淵源錄
同	四一	近思錄	同	四六	論語精義
同	四二	周儀二禮、近思錄	同	四八	五朝名臣言行錄
同	四八	近思錄、精義、	同	五一	淵源錄

同	四九	近思錄	同	五三	祭儀
同	五四	近思錄	同	五五	精義
同	五五	程氏遺書、外書	同	六三	通鑑綱目
同	五六	綱目、近思錄	同	六四	集傳(詩)
同	八一	詩傳			

然し易本義に關するものは皆無である。兩答書を對照することによつて未收錄のものが相當あることは容易に推測されるが、夫等にもなかつたであらう。それは次の理由による。

(2) 東萊が「古文周易經傳十二篇」を定めたのは淳熙八年朱子五十二歳の折で翌年六月朱子は之に序してゐる。朱子は之によつて本義十二卷を作つたもので、臨漳に四經を刊した時には序文共にそのまゝ踏襲したのである。このことは淳熙八年の「書所定古周易十二篇後」(東萊集七、五左)と淳熙九年夏六月庚子朔旦の「書臨漳所刊易經後」(文集八二、二二右)によつて明らかである。六十一歳始めて呂氏古易を刊したのではなく、五十三歳の折のものを踏襲したものは臨漳に刊したる序文に見えてゐる。之によつて朱子の本義を作りたるは少くとも五十三歳以後にあることを確か得ると思ふ。

(3) 易本義に就いて論ずるものは文集に六個所、語類に三個所發見される。まづ語類に見えたるものによれば、易本義は易を以て純粹に卜筮の用と見たものである。

方叔問、本義何專以卜筮爲主。曰且須熟讀正文、莫看注解、蓋古易象象文言各在一處、至王弼始合爲一、後世諸儒遂不敢與移動、今難卒說、且須熟讀正文、久當自悟。(語類六七、朱子本義啓蒙、大雅四九以後所開)

この點朱子は相當自信を持つてゐたことは

看易、先看某本義了、却看伊川解、以相參考。如未看他易、先看某說、却易看也、蓋未爲他說所汨故也。(全右) (語七〇所開)

に見られるが、然し尙遺憾な點があり不十分であつた。

先生於詩傳、自以爲無復遺恨、曰後世若有楊子雲必好之矣、而意不甚於易本義。蓋先生之意、只欲作卜筮用、而爲先儒說道理太多、終是翻這窠臼未盡、故不能不遺恨云。(全右 個五九以後所開)

易本義不謂遂達几下。舊讀此書、每於先儒之說、有所不快、因以妄意、管見一二、亦不自意推尋至此。尙恨古書放失聞見單淺、今又衰情不能卒業、不知明者何以教之、更望詳賜諭、毋使有待於後世之子雲。(文集五四、一二左 答應仁仲 六七後)

(4)而して未定書のまゝ竊出摸印された。

本義未能成書、而爲人竊出、再行摸印、有誤觀覽。啓蒙本欲學者且就大傳所言卦畫著數、推尋不須過爲浮說、而自今觀之、如論河圖洛書、亦未免有剩語。(文集六〇、一三左、年譜二、一七右 答劉君房 六七以後)

舊讀此書、嘗有私記、未定而爲人傳出摹印、近雖收毀而傳布已多不知曾見之否。其說雖未定、然大槩可見、循此求之、庶不爲鑿空強說也。又嘗作啓蒙一書、亦已板行、不知曾見之否、今往一通、試看如何。(文別三、一〇右、年譜二、一六左 答孫季和 六二)

讀易想亦有味、……………某之謬說、本未成書、往時竊出印賣、更加錯誤、殊不可讀、不謂流傳已到几間。

(文別六、二二右、年譜二、一七右 答楊伯起 七〇)

即ち私記で未定書のまゝ刊行されたのである。かく刊行されることによつて未定書としての易本義は成書となり得たのである。而して更に注意すべきは右に見る如く啓蒙と並記されてゐることである。

(5)この事實に注意してみると易本義が未定書のまゝ竊出摸印されたのは啓蒙の成書とほぼ時を同じうせることを知る。

大抵易之書、本爲卜筮而作、……………舊亦草筆其說。今漫錄二卦上呈、其他文義未瑩者多、未能卒業、姑以俟後世之子雲耳。近又嘗編一小書、略論象數梗概、并以爲獻。(文集三八、二〇右、年譜二、一六右 與趙提舉)

この「近又嘗編一小書」の一小書とは勿論啓蒙のことであるからこの答書は五十七歳頃のものであり、又

蓋嘗以康節之言求之、而得其畫卦之次第、……………至於經文、亦但虛心讀之、間略曉其一二、至有不可曉處、則便放下

不敢穿鑿以求必通、如此却似看得旨些意思、亦嘗粗筆其說而未成也。至於畫卦撰著之法、則又嘗有一書、摸印以傳、名曰啓蒙、不知賢者曾見之否。(文集五〇、二五右、年譜二、一六右)

之はその後間もなくのものである。かく本義と啓蒙を並記しほゞ時を同じくしてゐるとすれば、啓蒙の成書年次はその序により淳熙丙午暮春たる事確實なる故、本義が未定書のまゝ竊出摸印されたのは李性傳のいふ如く乙巳丙午の間にあると見て差支へなからうと思ふ。李性傳序には嘉熙戊戌月正元日の年次あり、朱子没後三十八年目に當る。李性傳は朱子の直弟子ではないが朱子の學に詳しく兄道傳と共に語類の編者である。李性傳序中撰著の成書年次に及べるものはすべて誤謬を發見し得ないから、この易本義の成書年次も亦定めし據る所があつたのであらう。之を決定的に根據付ける材料を發見し得ないのは甚だ遺憾至極であるが、前述の如き根據から消極的ではあるがその誤らざることを立證し得たと思ふ。

尙參考の爲朱子の撰著全部(文集所載の論文を除く)の成書年次試論を一覽表にすれば次の如くなる。成書年次を論ずるのはその書の實在を根據としての論であるから、朱子行狀以下の諸書を擧げてその實證に資した。御批正を賜はらば幸甚至極であります。

附圖一

朱子撰著	王懋齋 朱子年譜	成書年次試論	序文年次	黃幹(没後二)	趙希辨(没後五〇)
イ謝上蔡語錄	紹興二十九年 春三月(30)	二初 同上上	乾道四年四月 同上(39)上	朱子行狀	郡齋讀書附志
ロ論語要義	隆興元年 (34)	(佚) 同上	同上		
ハ論語訓蒙口義	同右	(佚) 同右	同右		

ヨ	力	ワ	ヲ	ル	ヌ	リ	チ	ト	ヘ	ホ	ニ
古今家祭禮	伊洛淵源書	程氏外書	通書解	太極圖說解	西銘解	八朝名臣言行錄	資治通鑑綱目	論語孟精義 (語孟要義)	家禮	程氏遺書	困學恐聞編
淳熙元年 (佚)(45)	同右	乾道九年 夏六月(44)	同右	乾道九年 夏四月(44)	乾道八年 冬十月(43)	同右	乾道八年 夏四月(43)	乾道八年 春正月(43)	(佚) 偽書	乾道四年 夏四月(39)	隆興二年 (35)
同上	同右	同上	同右	同上	乾道五、六年 (40)(41)	同上	淳熙十三年 (57)	二初 同同上下	乾道六年 (41)	同上	(佚) 同上
淳熙元年 夏五月	(無)	同上	欠	同上	乾道八年 冬十月	欠	乾道八年 夏四月	淳熙七年 同十一月上(51)	欠	乾道四年 四月壬子	欠
△古今家祭禮	△伊洛淵源錄		○通書解	○太極圖解	○西銘解	△本朝名臣言行錄	△通鑑綱目	△語孟集義	△家禮	△河南程氏遺書	
		程氏外書		太極圖解	西銘解義	八朝名臣言行錄	資治通鑑綱目 序例	孟子語精義	家禮	河南程氏遺書 附錄	
		12		1	1	24	1 59	14 10	5	1 25	

オ	ノ	ホ	ウ	ム	ラ	ナ	ネ	ソ	ソ	レ	タ
四經四子	中庸輯略	中庸章句或問	大學章句或問	小學書	孝經刊誤	易學啓蒙	周易本義	詩集傳	孟子集註或問	論語集註或問	近思錄
紹熙元年十月(61)	欠	淳熙十六年三月(60)	淳熙十六年二月(60)	淳熙十四年三月(58)	淳熙十三年八月(57)	淳熙十三年三月(57)	同右	同右	同右	淳熙四年五月(48)	淳熙二年(46)
同下	淳熙十六年三月(60)	同上	同上	同上	同上	同上	乙巳丙午(56)(57)	初二 三 甲寅 甲辰 甲戌 後	初註其後更改	同上	同上
四子經同冬十二月	(無)	淳熙十六年三月戊申	淳熙十六年二月甲子	淳熙十四年三月朔旦	淳熙十三年八月十二日	淳熙丙午春	(無)	淳熙四年十月	(無)	(無)	淳熙二年五月五日
	△中庸輯略	○中庸章句或問	○大學章句或問	△小學書	△孝經刊誤	○啓蒙 (著卦考誤)	○易本義	○詩集傳	○孟子集註	○論語集註	△近思錄
	中庸輯略 2	中庸章句或問 2 1	大學章句或問 2 1	小學之書 4	孝經刊誤 1	易說啓蒙 3	周易本義 10	詩集傳 詩序辨說 1 20	孟子集註 14	論語集註 10	近思錄 14

附圖

[illegible]

タ	ヨ	カ	ワ	ヲ	ル	ヌ	リ	チ	ト	ヘ	ホ
近思錄 14	古今家祭禮 20		程氏外書 13			西銘「集解」 1	八朝名臣言行錄 24	通鑑綱目 59	語孟集義 34	朱子家禮 1	程氏遺書附錄 1 25
同上	同上		同上	周子通書 1	太極圖說 1	同上		同上	論語集義 34	同上欠	同上
同	(欠)	同		同	同	同	△宋名臣言行錄	同	△論孟集義	同	同
	古今家祭禮 2				太極說一篇		五朝名臣言行錄 三朝名臣言行錄 14 10	通鑑綱目 59	論孟精義 14 10		
									同上存		
近思錄 14		伊洛淵源書 14	二程外書 14				名臣言行錄 後前 14 10		論孟精義 34	家附錄禮 1 5	二程遺書附錄 1 25

ク	オ	ノ	ハ	ウ	ム	ラ	ナ	ネ	ツ	ソ	レ
	朱熹所刻 臨漳四經	中庸輯略 1	中庸章句 2 1	大學章句 2 1	小學書 4	孝經刊誤 1	易學啓蒙 1	易本傳義 11 12	詩集傳辨說 1 20	孟子或集註 14 14	論語或集註 10 10
	書古經及序 共 5	同上 2	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
	同	△中庸輯略	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	尙書古經 5	中庸輯略 2	中庸章句 2 1	大學章句 2 1	小學之書 4	孝經刊誤 1	易學啓蒙 3	易本傳義 11 12	詩集傳辨說 1 20	孟子或集註 14 14	論語或集註 20 10
孟子要略 未見	同上 未見	同上存	同上存	同上存		同上存	同上存	同上存	毛詩集傳 宋志 20 存	同上存	同上存
		中庸輯略 2	中庸章句 2 1	大學章句 2 1	小學「集註」 6	孝經刊誤 1		周易本義 12	詩集傳 8	孟子或集註 14 7	論語或集註 20 10

コ	フ	ケ	マ	ヤ
楚辭 後辨集 語証註 6 2 8	海菴書說 7	參同契考異 1	校定韓昌黎集 外集 10 40	古禮經傳通解 集傳集註 14 23
楚辭 後集 語註 6 8	同上	同上	同上	同上
同			同	△儀禮經傳通解
楚辭 辨集 証註 1 8	書說 7	周易參同契 1		儀禮經傳通解 23
	同上存			同上存
楚辭 後辨集 語証註 6 2 8	書集傳 6	周易參同契考異 陰符經考異 1 1	原本韓文考異 10	儀禮經傳通解 37